（特活）バングラデシュと手をつなぐ会 会報誌

Milon

December 2025 No.157

写真：自転車タクシー“リキシャ”と地面に残る“アルポナ”

ションダニ病院のこれからを考える

～建物の老朽化と地域に求められる医療体制づくり～

倶楽部 FUNN　バングラデシュ衣装着付け教室　五ケ山オカリナコンサート
モスク体験ツアー　さわら地域わいわいひろば　カラムディ村だより

代表あいさつ

私たちの活動の意味は・・・？

バングラデシュと手をつなぐ会代表　ニノ坂　保喜

2024 年 8 月のバングラデシュの政変は、ハシナ首相（アワミ連盟）の国外追放、ユヌス氏の暫定政権樹立で一応落ち着いたかに見えます。しかし、ハシナ政権時代の経済成長の裏で進んだ腐敗と汚職、人権侵害の後遺症はあちこちに残っているようです。1,400 人が亡くなったとされる昨年の紛争、その後のいろんな政治団体の争いなどを見ていると、学生をはじめ、国民の多数の支持を得ていると言われるユヌス暫定政権にも、多くの課題が山積していると思われます。特に、腐敗の撲滅と、来年 2 月に予定される民主的な選挙に我々は、国民生活の視点から、これらの課題解決にバングラデシュの人々がどのように取り組むのか見つめていきたいと思います。

さて、この半年「手をつなぐ会」はいろいろな活動に取り組んできました。

5 月の総会に始まった今年度は、バングラデシュ国内の変化を横目で見ながら、活動を進めています。毎月の理事会を軸に、7月に NGO 福岡ネットワークの「倶楽部 FUNN」での発表、8 月にはにのさかクリニックのひまわりカフェでのバングラデシュ衣装着付け教室、10 月五ヶ山でのオカリナコンサート、11 月はモスク体験ツアー（私は初めて参加!）、さわら地域わいわいひろば（7 団体が参加、おおにぎわいの交流会!）などのイベントを行いました。

これらのイベント活動は、バングラデシュのこと、私たちの活動を広く伝えて、関心を持ってもらうと同時に、共に活動に参加してもらうためのものです。会員も積極的な呼びかけを行い、多くの皆さんが楽しい活動に参加してもらいたいと思います。

目　次

❑代表あいさつ　・私たちの活動の意味は・・・？
❑ションダニ病院のこれからを考える　二ノ坂保喜
❑イベント報告　・7/26 倶楽部 FUNN　山田英行
・8/19　バングラデシュ衣装着付け教室　末岡智子
・10/5　五ケ山オカリナコンサート　山本千晴
・11/2　モスク体験ツアー　伊藤牧　山根智香子　青木裕司　西宮奈緒美
・11/9　さわら地域わいわいひろば　吉野美紀　野田貴代美　古賀麻耶子
❑カラムディ村だより　ラフマン モクレスール
❑事務局だより　・行事予定・会計報告など

❑ションダニ病院のこれからを考える

バングラデシュと手をつなぐ会代表
ニノ坂 保喜

ションダニ病院の門をくぐり、敷地内をパノラマで撮影(ページ最下段写真)すると、左からインフォメーションセンター、正面に3階建てのションダニ病院と産科病棟が続き、右奥側には、職員宿舎、そして手前右端には、大木松子さん(前代表)の記念碑が建っています。美しく立派に見えますが、ションダニ病院の建物も 1995 年に建てられてから 30 年。

湿気の多いバングラデシュの風土の中では、劣化が激しく、あちこちに損傷が見られます。現地ではションダニ病院を巡って、建て替えるべきかどうか、縮小した医療機関とすべきか、などといった議論が重ねられています。

私たち手をつなぐ会でも、会員の高齢化、今後の見通し不透明といった状況の中で、なかなか今後の方針が決められずにいるのが現状です。

看護学校建設には 1 億円ほどの費用がかかり、それは大変な事業でした。全国の皆さんの温かい支援のおかげで看護学校が完成しましたが、再び同じような大事業に取り組めるかどうか、私（ニノ坂）自身も戸惑いを感じます。

現地では、メヘルプール県内にもう一つ学校を建て、その収益を病院建設に回したいという意見もあるようですが、そううまく行くものかどうか？ かといって、バングラデシュ国内で費用を捻出できるかどうかも困難でしょう。

今年 8 月に実施されたションダニ病院の評価に関する住民のアンケート結果を紹介します。

1）テトゥルバリアユニオン（カラムディ村の属する行政区画で、ションダニ病院の対象領域）
人口は 36,797 人。
面積は 34.24 平方キロメートル(福岡市面積の 1/10)。
2）患者さんの職業
農業が大多数で、他に主婦、会社員などです。
3）受診理由
発熱、風邪／咳、妊娠に関する問題／事故／糖尿病／高血圧／小児科などとなっており、一般的な病気、生活習慣病、および妊娠関連が主です。また、事故による受診が多いことも気になります。
4）受診時の医師の対応
大部分が満足だったとの回答でした。
5）今後の希望
24 時間医療サービス、マタニティケアセンター、小児科クリニック、遠隔医療などと共に、手頃な価格の検査、健康教育のワークショップが上がっています。

これらから考えると、現在カラムディ村に必要な医療は、一般的な病気（コモン・ディジーズと呼びます）への対処、慢性疾患（高血圧や糖尿病）に対する日常診療、それに妊娠と（できれば）出産に関する管理ができ、さらに引き続いて小児科疾患へのある程度の対応のできる医療体制、ということになるのではないでしょうか。

また、バングラデシュでも交通網がかなり発達してきていますので、地域の医療機関との連携も進められるのではないかと考えました。

これらをもとに、再度現地とも話し合っていきたいと思います。

皆様のご意見をお寄せください。

❑イベント報告

■7/26 倶楽部 FUNN

手をつなぐ会事務局
山田 英行

NGO 福岡ネットワークが２ヶ月毎に開催してる倶楽部 FUNN で気候変動の影響が著しいバングラデシュの現状について、オンラインと会場をつないで発表しました。
「途上国での気候変動被害を対岸の火事としか思えない先進国の我々。二酸化炭素を少ししか排出してない彼らなのに。」

私が感じてるこんなモヤモヤを参加者の皆さんと共有し、重要だけど緊急とは感じられない課題に対して、参加者の皆さんと考える機会を持つことができました。

倶楽部 FUNN とは、国際協力の現場で活躍する人やいろんな国の人からお話が聞けるイベント。

■8/19 バングラデシュ衣装着付け教室

手をつなぐ会事務局
末岡 智子

にのさかクリニック2階で、バングラデシュの民族衣装着付け体験を開催しました。
にのさかクリニックのボランティア団体、デイホスピスの方と利用者、20名ほどの集まりでした。
5 メートルもあるサリーをまとったり、豪華でカラフルな民族衣装に女性の方々が笑顔で何枚も着替えられ、とても楽しんで頂きました。

事務所に眠っていた衣装も日の目を見ることができました。あらためてこんなに喜んでもらえるのなら、又機会を設けようと思いました。
是非、次回はご参加下さいね。

■10/5 五ケ山オカリナコンサート

にのさかクリニックソーシャルワーカー
山本 千晴（旧姓：植松）

10 月 5 日に背振ダム近くの五ケ山豆腐店でオカリナコンサートが開催されました。当日は天気が心配でしたが、曇り空ながら雨が降ることはなく、5 つの団体(演奏者)の音色を聴くことができました。会場には様々なつながりでコンサートを楽しみにしていた方が集まり、オカリナ演奏と自然豊かな景色や空気との調和を皆さん、感じられてたようです。
お昼どきも過ぎた時間帯だったため、五ケ山豆腐店の店員さんも一緒に聴く場面もありました。
昨年とはまた違うオカリナグループ、曲目を聴くことができ、変化を感じるとともに、人と人とがつながることの大切さを改めて思いました。
ここに集まった方はどんな気持ちで来ているか、誰に思いをはせているか、どれだけの準備をしてきた

か…。ニノ坂代表が紹介したオカリナコンサートの歴史には、ある方と出会ったことが、きっかけで豆腐店とのご縁ができ、コンサート開催につながったとの話がありました。1 時間 30 分という限られた時間にたくさんの思いが重なり合い、穏やかな空間をつくっているように感じました。会場で過ごした誰もが常に人を思い、世界を思い、自分も含めた未来

の誰かへつながる生活・活動を行っているでしょう。
「継続は力なり」とよく言いますが、続けることは決して簡単ではありません。バングラデシュと手をつなぐ会の皆さんが活動を継続することだけでなく、私は私らしく、その活動を知り、応援し続け、これからも新しく出会う人とのつながりを紡いでいきたいと思います。

■11/2 モスク体験ツアー

今年で3年目を迎えるモスク体験ツアーは、外国人排斥デモのニュースが増える中で行われたためか、関心を寄せる方が多く、定員30名でしたが記者・カメラマンも含め、35名の参加となりました。

モスクに響く祈りの音色

片付けコンサルタント　伊藤 牧

今回、初めてモスクを訪れる機会をいただきました。

建物の中に入ると、天井の高いガランとした空間に声や足音が響き、独特の装飾がとても印象的でした。

女性ムスリムの衣装については「大きな布をかぶるだけ」と思い込んでいましたが、実際に試着してみると意外な場所にファスナーがあったり、紐で形を整えたりと、思った以上に工夫が凝らされていました。

国や地域によって生地や装飾も異なるそうで、その奥行きの深さに驚かされました。

これまで何度も目にしていたはずのものが、触れてみるとまったく違って見える――そんな体験でした。

礼拝の見学では、お祈り前のモスクに響く詠唱が心地よく広がり、その澄んだ音色に耳を奪われました。

実際の礼拝の際には、皆さんが絨毯の模様に沿って整列し、メッカの方向を向いて無言で祈りを捧げていらっしゃいました。

立ったり座ったりする一連の動作を1日5回続けていると聞き、日常の中でそれを守ることの大変さを感じ、また特に日本では、礼拝のための静かな場所を確保するのが難しい場面も多いだろうと思いました。

交流会では、ハラルランチを囲みながら、太陰暦と太陽暦の使い分けなど、暮らしの中に根付いた文化についても教えていただきました。

詠唱についても「美しく唱えなさい」という教えがあるとのこと。

無言での礼拝のようにみえたお祈りの最中にもあの美しい詠唱が皆さんの心の中で静かに流れているのかと感動しました。

さらに、ラマダーンの断食や食など色々な決まりごとは、唯一の神を信じるための命令であり試練であるという考え方も教えていただき、信仰を持たない自分にとっては新しい視点で、興味深く感じました。

親がイスラムの国に10年赴任していて何度か訪問していたのですが、一度もモスク内に入る経験ができなかったので、今回初めて体験できて嬉しかったです。

どうもありがとうございました。

今日からお友達

イスラーム教徒　山根 智香子

さる11月2日のマスジド(モスク)ツアーでは、たくさんの見学者、また新聞社の取材も来られ、大変賑やかな会となり、日本人ムスリムとして大変嬉しく思います。

この会は私も過去何回か参加したことがありますが、毎回参加してくださった皆さんの笑顔を見るたびに、このような機会に恵まれたことに本当に喜びを実感しました。

今回の参加者も、オープニングの日本人イスラーム教徒のアマー美穂さんによる講演を真剣に聞き入り、その後のモスク内部を皆さん興味深く見られていました。

ヒジャーブ(スカーフ)や民族衣装の試着も皆さん、とても楽しそうでした。しかも、私からするとモスクにいつも来ているムスリムの女性たちと見分けがつかないくらい、ヒジャーブを着けた姿が似合っていて、自然でした！

私がお話ししたある女性は、今回一緒にお祈りをしてみたかったから、ご自分で調べて、イスラームでのお祈りの服装(手足を隠す長袖、長スカート)で来られたとのこと。
昼の礼拝のイカーマ(礼拝開始の呼びかけ)が始まると、ムスリムの女性たちは「どうぞ」と彼女を自分たちの祈りの列に招待しました。私の横でお祈りしたその女性に礼拝が終わった後、感想を聞いてみると、神妙な気持ちになれたそうです。
またある大学生の女性は、自分の大学に在籍しているムスリム留学生たちのキャンパスライフが良くなるようにと、学食に彼らがメニューを選びやすくなるよう働きかけたり、またある女性は海外から来日したムスリムが福岡で美味しいハラルの食事が食べられるようにと、自分で調べたりしているとのこと。

今回のモスクツアーで出されたビュッフェスタイルのランチは２種類のカレーとビリヤニ、ナン。皆さん美味しそうに食べていました。ある方が「こんなに豪華な食事を用意して頂いて恐縮だから、後でモスクの募金箱に寄付します」と仰っていたので、私が「いえいえ!イスラームではお客さんに食事を出すことは喜捨になるんです。だから食べてもらうことは私たちにとって嬉しいことなんです!」と言うと、驚かれていました。
皆さん本当に笑顔で、帰りにはあるインドネシア人の女性が日本人女性に、「じゃあ〇〇!またね～」と言ってたので、「あれ?彼女知り合いだったの?」と聞いたら「今日友達になった」というので大笑いしました。
帰宅してこのイベントのことを中学１年生の娘に話すと、「今日来た人たちはみんないい人たちだね」と言っていました。子供らしい短絡的な意見かもしれませんが、「外国人」「宗教」というワードがあまりポジティブな話題として、取り上げられにくい昨今であり、このような時代にこのような人たちがいることに感銘を受けたのでしょう。
自分と違った価値観、文化を持った人たちをオープンマインドで理解しよう、コミュニケーションしてみよう、と一歩踏み出してみる人たちがいる限り、この世界はきっと悪い方向には行かないのではないのかな、と思います。
日本人でもあり、ムスリムでもある私は、そのような好奇心と行動力のある日本人の皆さんもいいな、と思ったし、慣れない日本での生活に苦労を感じつつも、日本人に敬意を払い、日本人にもっとイスラームを知ってもらいたい、日本人にもっと喜んでもらいたい、と笑顔で接していたムスリムたちにも、いいなと思ったのでした。

「モスクは何語？」

英進館世界史講師　青木 裕司

モスクに向かう直前、グーグル地図で場所を確認したら、「マスジド・アンヌール…」と記してありました。「マスジドって何だっけ?」。調べたら「アラビア語でモスクのこと、モスクは英語表記」。世界史の講師を45年間も務めてきたのに、初めて知りました・・ショックでした。
自分の無知に恥じ入りながら「マスジド」に入ると，皆さんが笑顔で迎えてくださいました。「ムスリムは客人を大切にする」という言葉を思い出しました。そ

して礼拝を見学。一心に祈るムスリムの皆さんの姿は厳粛さに満ちていました。
またムスリムのアマー美穂さんから、イスラームについて説明を受けました。とくに印象に残ったのは「私たちムスリムと、皆さんの間にある偏見の壁をとっぱらいたいのです」という言葉でした。
「世界史を勉強する意義は?」。生徒から時々出る質問です。答えは「世界の多様な文化・宗教を理解すること、そして相互の理解を通じて平和な世界をつくること」、これに尽きます。
現在、世界でも日本でも、異質な宗教・文化に対する寛容さが失われ、対立をあおろうとする言説が力を増しています。それに抗うには、「足を運んで未知の宗教・文化に触れること、そして世界の歴史を勉強することが重要だ」・・。これらのことを今さらながら、強く感じたしだいです。

今回のマスジド訪問には、家族3人で参加いたしました。帰宅の途中，イスラームについてほとんど知識がない女房が「イスラーム教って優しい宗教なんですね！」と申しました。参加して本当によかったと思いました。あっ、それから、ランチでいただいたカレー、大変美味しかったです！
ありがとうございました。

多文化共生への近道

JICA 九州　西宮 奈緒美

私が最初にムスリムに出会ったのは高校生の時でした。インドネシアから来た留学生がクラスメイトになり、その時に初めて、イスラム教を知りました。音楽室でお祈りをしたり、間違えて豚骨ラーメンを食べて神に謝ったりと、驚くことばかりでしたが、その度に「違う」ということを「学び」、「理解」し、「受け容れ」て行った気がします。
次の出会いは、JICA 海外協力隊でガーナに派遣された時です。私はモスリムの家庭で 2 年間ホームステイすることになり、「第 2 夫人を迎えても良いか」という相談をされました。最初は動揺したのですが、結果的に第 2 夫人にとてもお世話になり、そういう家族の形もあるのだと理解しました。
その後もご縁があり、大学で留学生担当をしていた私は、行事がある度に、ハラル料理のナビさんにケータリングをお願いしていました。モスク体験ツアーでイスラム教について教えて下さった、アマー美穂さんには、その時からお世話になっています。

ナビさんの料理は本当に美味しくて、カシューナッツカレーを買いに学内の店舗に走って行ったことも良い思い出です。
このように、意外と身近なイスラム教ですが、福岡マスジドでヘイトスピーチが行われたことをとても悲しく思います。今回のようにモスクのみならず、地元の NPO も一緒になって、宗教・文化についての理解促進活動を行っているにも関わらず、よその土地から来て、一方的に他者を排除するような行為は決して許してはなりません。
今回は、自分の体験も振り返り、どうすれば違いを受容できるようになるのか、ということを考えました。まずは高校生の時に出会った友人のファイカのように、1 人の「友達」を作ってみること。そして、今回のイベントのように「食べて」みることは、偏見をなくす第一歩だと思います。何より、多文化共生を目指すには、違いを学び、理解する必要があります。
このような「学び」の機会を提供して下さった皆様に感謝致します。

■11/9　さわら地域わいわいひろば

コロナ禍で中断された「さわら地域チャリティひろば」が、「さわら地域わいわいひろば」と名称を変えて、6 年ぶりに再出発しました。

にのさかクリニックの二ノ坂理事長・ソーシャルワーカーの寺町さん、バングラデシュと手をつなぐ会の事務局スタッフ 3 名と待鳥さんとで実行委員会を結成し、今年、3 月から毎月、話し合いを重ねました。
当初は従来の「さわら地域チャリティひろば」再開を目指していましたが、これまでのようなチャリティ活動が主な目的ではなく、”お互いをもっと知ろう、楽しく交流しよう”をモットーにすることにしました。

この趣旨を説明しながら従来の参加団体に呼びかけたところ、「ひかり作業所」「かしはらホーム」「板谷学園」「小さなたね」「在宅ホスピスボランティアの会“手と手”」「バングラディシュと手をつなぐ会」、そして会場となった「にのさかクリニック」の7団体の皆さん(各団体4～5名で約40名の参加)との交流会が実現できました。

つながりが育むもの

在宅ホスピスボランティア養成講座
受講生　吉野 美紀

私は今回、初めての参加でしたが、皆さんと一緒の時間を過ごせて、すごく楽しかったです！

始めに、各団体の事業・活動紹介では、事前にしっかりと準備されたプレゼンはすばらしく、お互いの活動や大切にしている思いがよく理解でき、心から皆さんに敬意を抱きました。そして、お互いを理解しあうということはとても大事だと、改めて認識しました。
次に、各団体からの特技の出し物の発表会である“お楽しみ会”に突入しました。

ダンスあり、歌あり、かわいい仮装あり、それからバングラデシュの衣装の着付けでモデルさんたちの誕生。
そしてひかり作業所さんの圧巻の手品ショーは Mr. マリックばりで、すごい歓声に包まれ「盛り上げてくれたで賞」を受賞されました！ 会場は一体化し、笑顔でいっぱいの、ほんとうに楽しいひと時でした。
そして最後はミニバザー、各団体ご自慢のステキな品々のお買い物を楽しみました♡
私は司会進行をさせていただいていたのですが、すごく楽しくて、安心しきって自分を出せました。それは、皆さんの人に対する温かさが会の雰囲気のベースだったからだと思います。
このような会ができることの意味、思いを共有することの意義を考えたとき、それらは深いです。“つながりが育むもの”はみんなの中でどんどん大きくなり、みんなの生きる力になると確信します。
みなさん、ステキな時間をありがとうございました。
またお会いしましょうね！

※吉野さんの素晴らしい司会進行で文字通り“わいわい”と会場がおおいに盛り上がりました。

素敵な笑顔との出会い

在宅ホスピスボランティアの会
「手と手」　　野田 貴代美

「手と手」は「ただそばに居る」をモットーに利用者さんのご自宅や入居施設を訪問し、お話し相手や見守りなどを行なっています。
今回は各参加団体との交流会、お楽しみ会、バザーと盛りだくさんの内容でした。

第1部の交流会では各参加団体の設立目的や歴史、活動内容等の紹介と利用者さんの一日の過ごし方、作業内容を深く知ることができました。職員の方々の熱意と努力のおかげで利用者さんが笑顔になるんだろうなぁと思いました。
「バングラデシュと手をつなぐ会」さんも古い歴史があり、多くの施設建設や教育などさまざまな支援をされていることを改めて知ることができました。

第2部のお楽しみ会では各参加団体による歌やダンス、手品、衣装の着付け体験などいろいろありました。

トップバッターの吉野さんの「ヤングマン」(西城秀樹)では、参加者全員が振り付けしながら踊り、一気に盛り上がりました。

続いて、かしはらホームさんの利用者さんが金髪のお姫様に仮装し、歌ってくれました。

バングラデシュと手をつなぐ会による衣装の着付けでは、私は体験はできなかったですが、5メートルのサリーを着崩れしないように、美しくからだに巻くテクニックは素晴らしいと思いました。鮮やかな色や細かな刺繍もとても綺麗で、異国情緒を少しばかり味わえました。

また、ひかり作業所の利用者による手品では、その見事な腕前に驚きました。

お楽しみ会では、目と耳とからだ全体で楽しまさせていただきました。

第3部のバザーでは菓子や布バッグなどたくさんの品が並び、私は竹炭とパウンドケーキを購入しました。竹炭は部屋に置き、ケーキも美味しくいただきました。

6年ぶりのさわら地域のバザーでしたが、各参加団体の事を改めて知ることができました。そして、素敵な笑顔がたくさん見られ、私も元気をもらえて、とても有意義な一日となりました。

携わってくださった皆さま、ありがとうございました。

お互いを近くに感じられる交流会

ひかり作業所職員　古賀 麻耶子

仲間(利用者)1名、職員2名でさわら地域わいわいひろばに参加させていただきました。

今回はコロナ禍以降、途絶えていた交流の復活が目的でした。

第1部では、各事業所の紹介、第2部にはお楽しみ会としてステージ発表の企画がありました。せっかくの機会なので、ひかり作業所からは手品が得意な仲間のNさんに参加をお願いしました。

当日は、上手くいくかな?盛り上がるかな?と職員もドキドキしていましたが、トップバッターの吉野さんのY.M.C.A(ヤングマン)からカラオケと続き、会場がとても盛り上がり良い雰囲気でした。

会場もあたたかい雰囲気の中、マジックショーがスタートです。スカーフの色が変わったり、奇々怪々?な技に皆さんも盛り上がってくれました。Nさんもとっても満足そうでした。

あっという間に時間がすぎ、閉会となりましたが、お互いを近くに感じられる交流になったと思います。ひかり作業所のことを知っていただける機会にもなりました。

私自身もバングラデシュの民族衣装を着させてもらい、違った体験ができ楽しかったです。準備も大変だったと思いますが、みなさんで集まり、つながった輪を今後も大事にしていきたいと思います。

最後に参加したNさんからの感想をのせておきます。「みなさんの(手品への)反応がよかったです。たのしかったです。ほかの事業所のみなさん、すごかったです。また、行きたいです。今度は歌謡ショーをしたいです。」

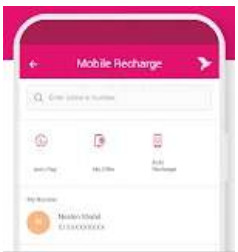
❑カラムディ村だより

ラフマン・モクレスール
手をつなぐ会副代表

■急速に変化する世界で活躍できる人材育成

私たちは今、AI をはじめとする社会の大きな変化のまっただ中にいます。その影響は先進国や途上国という区別を軽々と飛び越え、世界の隅々にまで広がっています。

たとえば福岡のアイランドシティでは自動運転の車が生活インフラとして走り始め、バングラデシュでは



bKash というモバイル送金サービスによって、銀行口座がなくても国中どこへでも瞬時に送金できる社会が実現しています。こうした変化は一様ではなく、時には途上国のほうが既存の仕組みを飛び越えて一気に新しい段階へ進んでいる分野もあります。

だからこそションダニションスタでは、この急速に変化する世界の中でも力を発揮できる人材をどう育てるかが重要になります。国や地域の違いを超えて活躍できる力、変化を恐れず学び続ける姿勢、多様な価値観を理解し協働する態度、これらは日本に住む私たちにとっても同じ課題ですし、むしろバングラデシュの新しい取り組みから学べるヒントがたくさんあります。

■バングラデシュ再建に取組むユヌス氏

ユヌス氏は 1940 年にバングラデシュのチッタゴンに生まれ、幼少期から社会の不平等を感じて育ちました。経済学を学び、アメリカで博士号を取得した後、独立直後の祖国に戻り、大学教授として貧困の実態と向き合います。貧しい人々が数百円の資金すら借りられない現状を知り、少額無担保融資(マイクロクレジット)を開始しました。この取り組みはグラミン銀行として結実し、2006 年にノーベル平和賞を受賞、福岡アジア文化賞など日本でも高く評価されています。

2024 年には市民の支持を受け暫定政府のトップとなり、「人間中心の経済」を掲げ国の再建に取り組んでいます。私たち日本に暮らす者にとっても、ユヌス氏の考えは「身近な小さな行動から社会を変えられる」という希望を与えてくれます。

■実践的教育に取組むションダニションスタ

ションダニションスタにおいても、日本の教育をお手本にバングラデシュで教育に変化を起こしたいと考えています。

日本の学校では、知識だけでなく「社会で使える力」を育てるため、現実の課題や体験を取り入れた学びが広く行われています。商店街の活性化や観光案内の改善など、地域の課題を調べ、住民や自治体と一緒に解決を考えます。生徒は机上の知識ではなく「本物の問題」を扱い、提案や発表まで行います。

学級の中では子どもたちが役割を持ち、日々の生活を自分たちで運営する「係活動」や「当番活動」があります。これは単なる作業ではなく、社会で必要とされる責任感・協働力・リーダーシップを自然に身につけるための教育的仕組みです。

ションダニションスタもこのような日本の実践的な教育を取り入れ変革を起こしたいと思います。

❑事務局だより

■２０２５年度　今後の行事予定

- 1/25(日)13:00～南福寺チャリティバザー出店（福岡市中央区南福寺）
- 2/8(日)10:00～15:00 バングラデシュ料理教室主催（福岡市健康づくりサポートセンター「あいれふ」）
- 3/22(日) 在宅ホスピスフェスタにパネル出展（アクロス福岡）

・3/22(日)10:30～17:00 気候変動イベント共催(福岡市 NPO・ボランティア交流センター「あすみん」)　参加費無料
1部 気候変動と私たちの暮らし
2部 脱炭素まちづくりワークショップ(カードゲームで学ぶ地球温暖化)

■助成金・寄贈プログラム
採択：九州地域 NGO 活動助成金 13万円
(モスク体験ツアーにて活用)

■会計報告
事務局　末岡智子

【2025 年度上半期の主な収支（4～10 月）】
▼収入
・正会員費　219,000 円
・賛助会員会　190,000 円
・受取寄付金　1,759,136 円
・受取助成金　130,000 円
(九州地域NGO活動助成金)
・バザー等売上　31,700 円
・行事参加費　0 円

▼支出
・人件費　941,213 円
・家賃　302,470 円
・水道光熱費　27,459 円
・支払寄付金　1,250,001 円
(ションダニ病院送金)

◆募金のご協力ありがとうございました。
（2025年 6 月～11 月） 敬称略/順不同

【ミロン募金】
秋吉美千代（日本セラピューテック協会）、有吉準子、飯野孝子、碇道子、石田陽子、市田敬子、平山正明（ウエルフェアネット）、大木ひろみ、大澤友二、小川信、押野圭子、帯田輝幸、鐘ヶ江寿美子、鐘ヶ江康子、金子貴美代、上潟口麻里子、蒲地純、川内恵美子、吉瀬恭子、草場耕二、久保田千代美、國光登志子、倉光剛郎、倉光東昭、古賀カツ子、小森重己、五反田千代、権藤説子、栄小知子、貞刈賜代、佐藤純子、柴田須磨子、重橋亨、白石信子、末岡智子、鈴木崇世、瀬尾康子、関根悠紀子、副島タカ、髙嶋裕二、竹末龍也、田島寛、多々野須美子、立場美枝子、谷口純子、田村賢二、塚原晃子、道本実保、特定非営利活動法人たんがく、中野朝恵、長野洋子、中村サワ子、ニノ坂富士子、野副美喜、野田景子、濱田絹子、濱田民子、原紀子、廣田恵津子、細野容子、牧瀬千里、松添仁、松田純子、溝上明子、牟田壽、元田晶子、安浪加余子、ｺ)けやき、ラフマンモクレスール、和田節子

【募金】
陶山　紀美子、医療法人ひらまつ病院、江崎　好枝、山下　久代、中園　久美子、阿比留　典子、久米　隆、谷口　静子、安田　ふさ代、小野田　桂子、馬場キミ子、吉田　一代、山崎　麻子、杉本　潔、倉光　陽大、倉光　登喜子、一塚　カオル、じゅうばし内科医院　重橋　亨、畠山　万千、吉松　慶子、医）出水クリニック　出水明、宮辰建設株式会社あゆみの会、曽場尾　雅宏、中村　敏子、林田　直子、小山田　浩定、太田　勇司、渋田　枝美、有吉　準子、神　素子、越智吉郎、鬼束　次男、永田佐保子、今泉幸男・ゆみ子、竹内龍也、白倉容代、八木良子、杉園順代、瀬角南、大脇為常、西田真紀、峰松小百合、中原妙代、香原弘明

【募金箱設置協力】
にのさかクリニック、シーベスト野芥店、さわらスイミング、かも川薬局野芥店、はぴね福岡野芥、高砂園、グリーンビレッジテニスクラブ、春風薬局、宮浦事務所 FLAP、大木整形・リハビリ医院、岡村ツタエ、グループホームあおい、なごみの家、白熊園、佐田紘子・裕一、なかよし眼科、山本富美江、大賀薬局野芥店、特養）よりあいの森

【募金に添えられたメッセージ】
❀少額ではありますが、少しでもお役に立ちますように。

たくさんのご協力、本当にありがとうございます。心から感謝申し上げます。

特定非営利活動法人
バングラデシュと手をつなぐ会

バングラデシュと手をつなぐ会では、現地ＮＧＯ「ションダニ・ションスタ」とともに、バングラデシュ西部のメヘルプール県・カラムディ村やその周辺地域等で、1989 年から《教育》《保健医療》《生活 向上》の分野で支援活動を行っています。

事　業　内　容

●現地（バングラデシュ）での活動

① 教育(ジャパニ小学校、奨学金制度、ションダニスクール)
② 保健医療（ションダニ病院、ションダニ看護学校、健康教室）
③ 生活向上（インフォメーションセンター）

●国内での活動

① 総会（毎年 5 月)、理事会（毎月 1 回）よる活動方針の決定や運営
② 会報誌『ミロン』を年 2 回、6 月・12 月に発行
③ 現地訪問の実施、報告会実施、報告書作成
④ バングラデシュ料理教室、チャリティバザー、チャリティコンサートなどの開催
⑤ 出張講座や各種イベントでのブース出展などにより、活動紹介

特定非営利活動法人バングラデシュと手をつなぐ会
〒814-0132 福岡市城南区干隈1丁目16−25
ウェンディハイツ 303 号
☎092-407-7701　Fax092-407-7702

email: info@tewotunagukai.com
https://tewotunagukai.com
https://www.facebook.com/tewotunagukai

手をつなぐ会の活動全体の支援

ゆうちょ銀行口座　01720-2-10442
特定非営利活動法人
バングラデシュと手をつなぐ会

ミロン募金（バングラデシュ現地支援）

毎月の定額振替
お問い合わせください

編集後記　Milon

今回の原稿の中で日本人ムスリムが取り上げた「オープンマインド」という言葉が深く印象に残った。
自分の価値観、文化、能力、考え方など、様々に異なる背景を持った人々と対話や体験を通じて、理解し合うことの大切さを改めて思った。これは「さわら地域わいわいひろば」開催趣旨にも通じるものがあると気づいた。　（やまじぃ）

会　報　名　ミロン 157 号　2025 年 12 月発行
※「ミロン」は、ひとつになる、手をつなぐという意味のベンガル語です。
発行責任者　二ノ坂 保喜
（バングラデシュと手をつなぐ会　代表）
表紙・監修　小畑 麻乙
編集実務担当　山田 英行
校正担当　末岡 智子・野田景子